



県内初例のナスビ形農耕具

ナスビ形農耕具とは

今回は平成16年に発見された「ナスビ形農耕具」についてお話します。これは農耕具の鋤身・鍬身に共通の特徴的な形態で、「ナスビ形」とは、野菜の「なす」を縦割りにした形をしていることから名づけられました。

ナスビ形農耕具の出現と伝播

このナスビ形農耕具は、近畿地方を中心に、弥生時代後期から古墳時代後期の遺跡から数多く出土しています。

その起源については、ほかの農具と同様に大陸や朝鮮半島から伝来したという説がありましたが、最近の研究によって、弥生時代中期に吉備地方（現在の岡山県周辺）にあったものが、この原型となったことが判明しました。

吉備地方で出現したナスビ形農耕具は、古墳時代にかけて全国に伝播しました。その伝播ルートは大きく4つのタイプに分かれます。中でも日本海北上型は、山陰から日本海を北上し、北陸を経て、信州から北関東をとおり、東北（仙台地域）に広く分布するグループです。主に東北日本の日本海側から太平洋側にかけて分布するようです。

これまで新潟県域にはその分布が認められていませんでしたが、平成16年に南魚沼市（旧六日町）北沖東遺跡から3個体が発見されました。

鋤か鍬か!

鋤も鍬もどちらも土を耕したりする道具の一つです。鋤はもっぱら踏み込んで土を掘り起こすためのもので、柄と土に触れる部分の身が直線的にのび、スコップのようになっています。それに対して鍬は、打ち下ろして土を掘り崩すのに適しており、身に対して柄が70度ほどの角度で取り付けます。

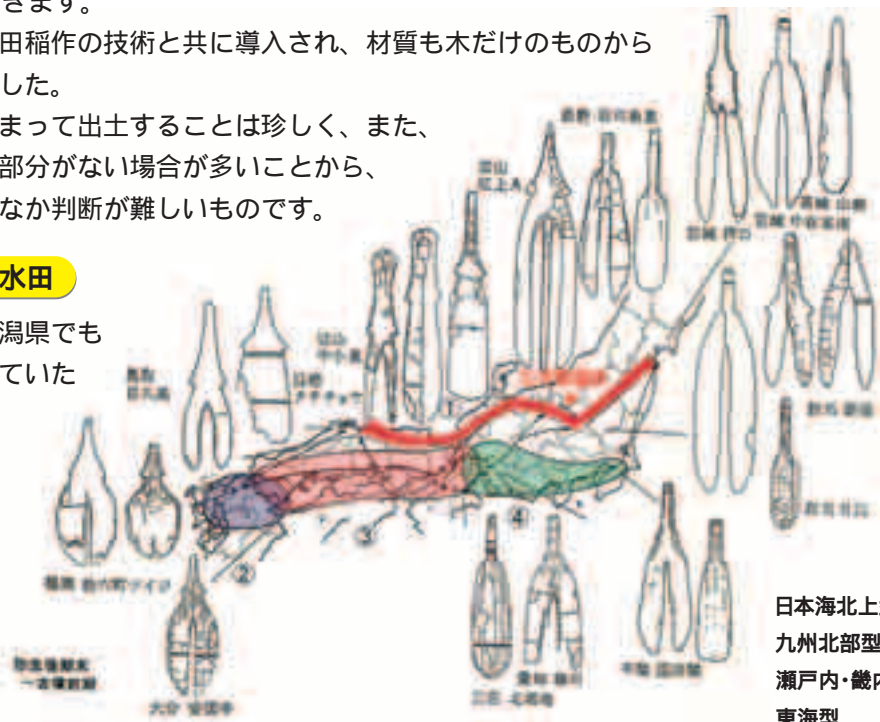
これらの道具は日本列島に水田稲作の技術と共に導入され、材質も木だけのものから鉄を用いたものに変化してきました。

柄とその先の身の部分がまともに出土することは珍しく、また、身も欠損して柄と接合する部分がない場合が多いことから、鋤であるか鍬であるかは、なかなか判断が難しいものです。

発見が期待される古墳時代の水田

これら農耕具の発見から、新潟県でも古墳時代には水田稲作が行われていたことが確認できました。

新潟県埋蔵文化財調査事業団で越後平野や高田平野などで、古代から中世にかけての水田を調査しています。今後、古墳時代やそれよりも古い弥生時代の水田の確認も期待されます。
（調査課資料担当：山本 肇）



北沖東遺跡出土
古墳時代前期の
ナスビ形農耕具

樋上昇1994「木製農耕具の地域性について」を一部改変